



## 👁️👁️ みどころ

『ムルデカ』(2001年)では、1945年8月15日の日本の敗戦後、日本軍将校がオランダ領ジャワ(インドネシア)で、オランダと戦って独立を目指すインドネシアの青年たちを応援する姿を初めて知ったが、さて、大英帝国からのインドの独立は・・・？

それは1947年8月15日にインドとパキスタンの分離独立という形で実現したが、そこで英国最後の総督は、いかなる役割を？

そして分離独立を果たしたインドとパキスタンの国境線は如何に・・・？

映画はエンタメであると同時に勉強！

インドの独立(インドとパキスタンの分離独立)についての「歴史秘話」を本作でしっかり勉強したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■1947年8月15日のインドの独立を考える■□■

日本の敗戦は“日本の一番長い日”である1945年8月15日だが、それから2年後の1947年8月15日、大英帝国の植民地だったインドは独立した。もっとも、それはインドとパキスタンという2つの国家に分離しての独立(パキスタンの独立は8月14日)だが、その世界史的そして、アジア史な意義は如何に・・・？

私はデビット・リー監督の『アラビアのロレンス』(62年)を高校生の時に鑑賞し、そのスケールの大きさに驚かされたが、正直なところ、主人公のトマス・エドワード・ロレンスが第二次世界大戦中のイギリスの中東政策においていかなる役割を果たしたのかについて十分理解することができなかった。しかし、その後何度もテレビで放映されるたび

に繰り返し鑑賞し、かつ資料を勉強する中で、やっと少しずつその意味を理解することができるようになった。

日本は第二次世界大戦中にインドやビルマ（ミャンマー）そしてインドネシア等にも侵攻して、イギリスやオランダと戦ったが、1945年8月15日の敗戦によって日本軍は武装解除されることになった。ところが、オランダ領ジャワ（インドネシア）では、オランダからの独立を目指すインドネシアの青年たちと共に旧日本陸軍の将校たちが決起した。そんな事実があったことを、私は『ムルデカ』（01年）ではじめて知り（『シネマ1』89頁）大いに感動したものだ。また、ブラッド・ピットが主演した『セブンイヤーズ イン チベット』（97年）では、チベットの“ダライ・ラマ”なる人物の存在と1997年の中国人民解放軍によるチベットへの軍事侵攻の姿をはじめて知り、大きなショックを受けた。それと同じように、1947年8月15日のインドの独立とは・・・？そして、その喜びと共にそこで必然的に生まれたさまざまな悲劇とは・・・？本作を鑑賞することによって、1947年8月15日のインドの独立についてしっかり考えたい。

## ■□■この女性監督は、自分の家族の体験を脚本化し本作を！■□■

本作の脚本を書き、監督したのはグリнда・チャーダという1960年生れのインド人の女性だが、本作ラストの“つくり方”と字幕を見ると、本作はインドとパキスタンの分離独立について、彼女自身の家族の体験が下地になっていることがよくわかる。本作は“歴史モノ”として観れば、その主人公は邦題になっている“英国総督 最後の家”に、イギリスからインドへの主権譲渡をするため妻エドウィナ（ジリアン・アンダーソン）と娘のパメラ（リリー・トラヴァース）と共に赴任してきた英国総督のマウントバッテン卿（ヒュー・ボネヴィル）。そして、彼がその最後の任務を達成するために欠かせないキャラクターが、インド独立運動のリーダーでインドの初代首相のジャワーハール・ネルー（タンヴィール・ガニー）、彼の指導者マハートマ・ガンディー（ニラジ・カピ）そして、パキスタンの建国者ムハンマド・アリー・ジンナー（デンジル・スミス）だ。しかし、本作を恋愛モノとして観れば、その主人公は“英国総督 最後の家”でマウントバッテン卿の世話係として働くインド人青年ジート・クマール（マニーシュ・ダヤール）と、同じく“英国総督 最後の家”でパメラの秘書として働くムスリムのインド人女性アーリア（フマー・クレイシー）だ。

クマールはかつて警察官としてラホール刑務所に勤務していた頃、そこに投獄されてきたアーリアの父親がアーリアとの面会が許されなかったにもかかわらず、クマールが彼女からの手紙や食料などを届けたことがあり、そのことが契機となってクマールはアーリアに思いを寄せていた。アーリアもクマールからの猛烈なアプローチに応えようとしたが、ムスリムのアーリアには幼い頃からの婚約者がいたうえ、クマールとは信仰が異なるため、投獄によって失明した父親のことを大事に考えるアーリアはクマールとの結婚に踏み切れ

ないままだった。そして、そんな状況下、インドとパキスタンの分離独立の時がやってくることに・・・。

そして、1947年8月15日にはすべてのインド人はインド国民になるかそれとも、パキスタン国民になるかを選択するとともに、2つに分割された領土のどちらかに行かざるをえないことになったが、さて、クマールとアーリアの選択は・・・？

## ■□■世界一大きな官邸に注目！■□■

国土面積の小さい日本では総理大臣の官邸はチャチなものだが、あなたは国家元首が住む世界で一番大きな官邸はどの国のものか知ってる？それは中国？アメリカ？それとも、オイルマネーで近時大金持ちになった有名なドバイがある南アフリカの国 UAE？それともカタール？クウェート？いやいや、それこそ本作のタイトルになっているインドの英国総督の官廷だ。本作冒頭、マウントバッテン卿たちがその“英国総督 最後の家”に“最後の総督”として乗り込む姿が描かれるが、その規模の大きさにとにかくビックリ！この建物は17年間かけて1929年に完成したもので、大英帝国のパワーを表現し、全世界を威圧する建物だったが、20年も経たないうちに、その主が英国総督からインドの初代大統領に変わろうとは誰も予想しなかっただろう。

グリンド・チャータ監督は本作導入部で“総督の家”の壮大さをタップリと見せつけてくれるが、他方で貧困の中で生きている数億のインド人達の姿も見せてくれるので、そのコントラストにビックリ！いくらなんでも、日常的な食糧難が続くインドで、パメラの愛犬のために用意されたエサが新鮮な鶏肉で、しかも、それが丁寧に調理され、銀の器で提供されるのは如何なもの・・・？そこで思わず母と娘が一口つまみ食いをしてしまうシーンは見方によってはユーモラスだが、ホントはグリンド・チャータ監督流のブラックユーモア・・・？

そんなワンシーンを含めて、原題を『Viceroy's House』、邦題を『英国総督 最後の家』とした本作では、その建物自体が一つの主役として扱われている。私はそれはそれとして興味深いのが、実はパンフレットにある村山和之氏の「植民地独立という名の初手術」と題するコラムにあるように、“英国総督 最後の家”よりも、英国総督最後の仕事としての、インドとパキスタンの“分離独立”の物語にもっとウェイトおいて描いた方が良かったのでは・・・？『アラビアのロレンス』はかなり難しかったけれども、今日までテレビで何度も放映されている姿をみれば、私はよけいにそう思うのだが・・・。

## ■□■インド国内での政治対立は？宗教対立は？■□■

インドでは“インド独立の父”と呼ばれ、“非暴力と不服従”の思想を貫いたガンディーが有名。また、ガンディーの後継者となり、インドの初代首相となったネルーも有名だ。しかし、“インド国民会議派”を代表するガンディーとネルーの対極にある“全インドムス

リム連盟”のリーダーたるジンナーはあまり知られていない。また、イスラム教とキリスト教の対立は中世から有名だが、インドではイスラム教とヒンドゥー教の対立があった。そして、“全インドムスリム連盟”はイスラム教徒を代表し、“インド国民会議派”はヒンドゥー教徒を代表していたため、“全インドムスリム連盟”と“インド国民会議派”は政治的対立のみならず、宗教的対立もはらんでいた。そのためイギリスは、主権をインドに譲渡した後のインドの独立については、その両者の政治的対立と宗教的対立を抑えることが不可欠だったが、それは、どのようにすれば可能なの？インドの最期の英国総督たるマウントバッテン卿の任務は何よりもそこにあったが、本作に見るガンディー、ネルー、ジンナーの三者三様の主張を聞いていると、その調整がいかに困難かがよくわかる。理想はもちろんインドが1つの国にまとまった上での独立だが、ジンナーはあくまで“全インドムスリム連盟”によるパキスタンの建国を主張し、インドとパキスタンの“分離独立”に固執したから、ガンディーとネルーVSジンナーとの意見の調整は不可能。そう考えたマウントバッテン卿は次第に現実路線として、インドとパキスタンの分離独立論に傾いていった。それを別の視点から手助けしたのが、ガンディーによる「インドを統一国家にして、初代首相をジンナーに」という提案だ。

日本では1993年8月18日の衆議院議員総選挙で自民党が単独過半数に達しなかったことを受けて、新生党、新党さきがけ、日本新党の3新党を中心とする“非自民、非共産8党派”の連立政権構想が進み、8月9日には、細川護熙を首班とする連立内閣が成立し、38年間政権の座にあった自民党を引きずり下ろすことに成功した。続いて、翌1994年6月30日には政権復帰を目指す自民党が社会党と新党さきがけと連立政権を組むことを合意し、村山内閣を登場させて日本中をあっと驚かせた。中国では敵同士だった国民党と共産党が3度にわたって“国共合作”を成し遂げ、“敵の敵は味方”という考えが方定着しているが、日本での上記のような生々しい政治闘争は珍しいものだった。

よくよく考えてみると、ガンディーの上記提案は、細川連立政権、自社さきがけ政権を誕生させた時の発想と同じようなもので、ネルーは渋々(?)これを受け入れたが、ジンナーは頑としてパキスタンの独立に固執したため、ガンディー案は日の目を見ないまま葬り去られることに……。

## ■□■総督の力はどこまで(1)内助の功は?妻の影響力は?■□■

近時、日本では“モリカケ問題”の中で安倍晋三総理の妻・昭恵夫人の果たした役割がクローズアップされてきた。男性の上位性がまだまだ強い日本では、いかにファーストレディとはいえ、夫の公の仕事上の問題に妻が首を突っ込み、意見を述べることは少ない。しかし、アメリカでは、クリントン元大統領の妻ヒラリー・クリントンはもとより、オバマ元大統領の妻ミシェルさんも、トランプ現大統領の妻メラニアさんも、それぞれそれなりの存在感を示している。

本作に見るマウントバッテン卿の妻エドウィナは、それらのどの女性よりも、また『ウインストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』(17年)と『チャーチル ノルマンディーの決断』(17年)で出たチャーチルの妻クレメンタイン・チャーチルよりも積極的に夫の仕事に“口出し”しているうえ、総督夫人として、独自の分野での活動も展開しているのだから、それにも注目！「公人」である総督に対して、その妻にすぎないエドウィナが、どこまで権限を持っているのかは微妙なところだから、マウントバッテン卿が悩んだ末最終的にインドとパキスタンの分離独立の方針を決め、それを予定より10ヶ月も早い1947年8月15日に実行すると決定したことに対していろいろと異議を唱えるエドウィナ夫人の姿に、私は少し納得できない。

『ウインストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』や『チャーチル ノルマンディーの決断』でみた英国の首相チャーチルと、本作に見る英国最後のインド総督マウントバッテン卿の任務の遂行において、それぞれの妻といかなる関係にあったのかを対比してみるのも一興だ。

## ■□■総督の力はどこまで(2)チャーチルの影響力は？■□■

私は観ていないが、リチャード・アッテンボロー監督の『ガンジー』(82年)は興味深い映画だったようだ。そして、パンフレットの中のプロダクションノートで、グリнда・チャタダ監督は本作品について、「イギリスで育った私は、一般的な歴史物語を聞かされてきました。それは、ガンディーによって先導された長期にわたる自由を求める闘争ののち、1947年にイギリスはインド返還のためマウントバッテン卿を派遣、私たちは互いに戦いを始めたという内容です。そのためマウントバッテン卿は、国を分離せざるをえなかった。だからある意味分離独立の暴動は、私たちに責任がある。これは、リチャード・アッテンボロー監督の独創性に富んだ映画『ガンジー』で描かれた歴史のバージョンです。」と語っている。しかし、同時に、彼女は、「でも今調べていくと、それはあまりに一方的すぎる解釈だとわかります。」と語っているから、本作ではその点をいかに描いていくの・・・？実は、それが私の最大の注目点だった。

前述したように、インド国内におけるガンディー、ネルーが率いる“インド国民会議派”とジンナーが率いる“全インドムスリム連盟”との政治的対立と宗教的対立は激烈だったため、結局マウントバッテン卿はガンディーの提案を採用せず、インドとパキスタンの分離独立を採用することになった。そして、中部がインドに、東側と西側がパキスタンの領土として二国が分離独立することになったが、そこで問題は国境線をどう引くかだ。チャーチルは、マウントバッテン卿を補助する(監視する?)役割で、ヘイスティングス・イズメイ大將(マイケル・ガンボン)を配置していたうえ、現実に国境を引くという超難解な作業は弁護士シリル・ラドクリフ(サイモン・キャロウ)を担当させたが、さあ、期限までにでき上がってきた国境線の引かれた地図を見てみると・・・？

『アラビアのロレンス』では、「アカバ」という地名が大きなポイントになっていたが、高校生の時に観たときはそれがどんな重要性をもつか全く分からなかった。しかし、第二次世界大戦中からガンジーを嫌っていたチャーチルが、裏で糸を操って(?)ヘイスティングス・イズメイ大将とシリル・ラドクリフに引かせた国境線は、英国にとって重要な港を使いやすくするためパキスタン領に入れるという、英国にとって有利な境界線が引かれていたから、アレレ……。しかも、インドとパキスタンの分離独立に際して決定されたその国境線を定めた地図は、実は何年も前にチャーチルが引いていた地図と同じだったというから驚きだ。そんな歴史秘話を学ぶと、歴史の流れはすべてその時々人間が作りだしたものだということがよく分かってくる。私はそんな目で現在放送中のNHK大河ドラマ『西郷どん』を見ているが……。

## ■□■任期満了後の総督とその家族の生きざまにも注目！■□■

歴史ドラマ、歴史秘話としてのインドとパキスタンの分離独立問題は、結局チャーチルの独り勝ち、マウントバッテン卿の一方的な敗北で終わったことが本作を観ているとよくわかる。しかし、それにもかかわらず、マウントバッテン卿は、日本人はほとんど知らないが、英国ではそれなりの役割を果たした人物として、評価されているらしい。それが、本作の“付録”ともいうべきラストの部分で、クマールとアリアの恋愛劇の結末と共に語られるので、それにも注目！

アメリカの歴代大統領は、クリントンやオバマのように任期満了後も様々な役割を果たしているが、それは、英国最後のインド総督としての任期を終えたマウントバッテン卿も同じ。そして、マウントバッテン卿の任期中も、夫の内助の功のほか、さまざまな独自のボランティア活動を展開していた妻のエドウィナも同じだ。インドとパキスタンの分離独立後のマウントバッテン卿とその妻そして娘のパメラが果たすべき役割は、インドとパキスタンの分離独立に伴って必然的に生じた、1400万人の民族大移動という大問題の中で起きるさまざまな試練の手助けをすること。具体的には、医療ボランティア等だ。本作の“付録”部分ではその姿が登場するので、それをしっかり確認したい。

アラビアのロレンスは第二次世界大戦終了後、失意の中で過ごし、映画の冒頭で観たように、バイクの暴走運転によって、死亡してしまったが、さて、最後のインド英国総督として、英国からインドへの主権譲渡という困難な任務を成し遂げたマウントバッテン卿の心の中での達成感と満足感は？本作の鑑賞後は、それもじっくり考えたい。

2018（平成30）年9月21日記